

六月二四日

朝九時地下でちよつとした指示のあと歯医者へ。あっさり一本抜かれてしまう。歯石のねばりだけで抜けずに持つてくるような具合だと女性のアシスタントがぬかして、抜いちゃえ抜いちゃえという事になった。今夕から中国なのでレセプションの席でスピーチもしなくてはならないから歯抜けはまずいなど思ったが、本当に下の前歯がグラグラしているので、これでは中華料理は喰えなあと考えたり私の考えもグラグラしているうちに、アツという間に抜かれてしまった。抜かれたアトは少し痛みが残って我ながら元気が失せ、外で何をやる気も失くし又世田谷に戻った。人間はまことに多愛のない生物である。佐藤健は良く放射線治療を四十二日間連続で耐えたなあ。俺なんか歯一本でこれなんだから。アレはえらいと再び沈黙考。少し休んで又地下へ。地下のメンバーへ再び文句言ってもダメだろなこいつ等はと思いなながら、しかし文句を言う。男も女も二〇代は全滅だ。打つ手はない。又カに釘だ。

十五時前の新宿発成田エクスプレスで成田へ。野村同行。隣の席でゴボゴボせきをしている。オタクは風邪を引きやすいというのは本当なんだ。只今、日本時間七時二〇分。ANA北京行の機上である。三〇分程かけて明日の中国でのレセプションの演説の草稿を作った。隣で野村がそれを整理清書してくれている。北京到着までかかるかと思っていた作業が意外に早く終わったので、ホ

ッとしてブルゴーニュのワインを少しいただいた。年をとって、やるべき事をいつ何処でやれば良いかの原理だけは解るようになった気もする。そうでもないか。この類の原理、つまり、全て相手あつての事なのだの諸原理のようなものは磯崎新から色々学んだような気がする。我ながら度胸だけはついてきたよね。仕事は小さいのに肝玉だけは大きくなってしまつのも危険な事ではあるのだが。

今、飛行機は朝鮮半島を横断して黄海に抜けつつある。北京では北京大学の張永和と二時に会う予定があり、演習Gのインターネットスタジオその他の相談をするつもりだ。北京時間二〇時過北京着。空港に出迎えあり。HOTELで二時半北京大学の張永和と会う。相変わらず柔和な人柄で大人だな彼は。インターネットスタジオへの参加を依頼する。度々日本へは来ている様だ。コロ島開発にからむ人数と会う。何がなんだかわからぬが、マどうとでもなれという感じ。コンペ参加者を代表して明日祝辞を述べよとの事で思わぬ事がドデンドデンとおきるなコレワ。何が起こってもガタガタしない気持だけは用意した。深夜北京の高層ホテルの一室に居る。明日はコロ島へ出掛け政府関係者市長その他と会う予定だが何が起きてもおかしくない。今夜会つた中国の連中の雰囲気がそう伝えてくる。今の日本にはない荒々しく、大ざっぱな感じ。それを楽しめるかどうかは私次第なのだ。別に何も期待していないし失望もない。

六月二五日

朝五時半起床。六時にレストランへ降りてみたが、真暗であつた。六時半朝食。韓国の観光客が多い。七時大型バスでHOTELに発。コンペ参加者は全員集まつたようだ。アメリカ二社フラン

ス一社シンガポール一社そして日本は私。バスの中で昨夜伝えられた予定がすでに変更されたと知らされる。何もアテにはしていない。かなり激しい雨の中を走っている。

十二時過バスはまだ高速道路を走っている。先程葫蘆島まで八〇KMの標示が出ていたからまだ小一時間はかかるのだろう。雨は上った。風景は変わらない。山西省よりも豊かな感じはする。京沈高速道というのか。多分北京から三四五KM地点だ。今はトウモロコシ畑が続く。土で囲んだビニールハウスの中で何を作っているのかは視えない。

十三時過葫蘆島市着。十三時三〇分国際ホテルチェックイン。予定より二時間遅れ。ここは夢つつの町だな。ガーデン花園シテイ構想のもとに動いているようだ。ミラージュシテイだね。ここもイルミネーションが似合いそう。昼食後葫蘆島市長らとレセプション。スピーチを一つこなして、計画地見学。中国型のレジヤリーについて、余暇について考える必要がある。ちよつとここでは国際化うんぬんには無理がある。中国文化の西欧化のパターンだろう。な率直にやれば。

磯崎のマカオ、海市計画をここにもってきたらどうか。こつやつて自分も中国の現場に身を置いてみて、はじめて磯崎の中国での冒険が少し常軌を逸している理由がわかってくる。当然私も無茶苦茶な提案をすることになるし、もう半日の体験でそれを決めている。巨大に中国型の遊びを提案してみよう。

六月二六日

昨夜は中華料理とマオ台酒をいただき、良く眠った。ようやく体がスッキリしてきた模様。朝七時起きる。風呂を使い七時半朝食。野村が昨夜デベロッパが用意していた小報告書を読んで

くれていて、朝食前に小レクチャーを受ける。今日は天気が良い、葫蘆島のシャングリラである由縁を知ることができるか。なんだかそうでもなさそうな気もしきりにするんだが。その土地に何か夢中にさせるものが無いと、一所懸命にはなれないものだ。龍頭の碑と土地の形と龍の話があるらしいので、それを野村に調べさせよう。

九時より各国の第一次プレゼンテーション、シンガポール、米、国、日本、米、国、フランスの順。私は手短かに飛行機の中で用意したモノを少し修正してプレゼンテーションした。プレゼンテーション直後に新聞記者が私のプレゼンテーションの内容を記事にして良いかと来たから、マア良かったんじゃないか。フランスは幼稚ポイ。シンガポールは的外れ、アメリカの一つは古く、もう一つは何も内容がなかったから、これが一番の強敵かな。最初のプレゼンテーションで手の内を見せてしまうのは馬鹿だ。

昼食を喰べて葫蘆島を去り、北京へ。

先程十五時頃トイレ休みでサービスエリアに立寄った。なんとその間近まで万里の長城が走り下っていた。間近の急峻な山岳にも延々と長城の壁は建設されていた。あんな山岳をモンゴルの大軍が越えてくるとはとても考えられず、万里の長城は中国的觀念とある種の原理的なモノへの希求がなされた構築物であるのが理解できた。中国の歴史ではこの手の觀念は度々皇帝、王によって体现されてきた。やはり毛沢東は王だったのだ。彼の死後、今にいたるまで中国に王は現れていない。

ゲートはようやくやくにしてパレルモを去り、ジルジエンティの古代ギリシャ遺跡に辿り着いた。鈴木博之と半日程神殿を巡った。ジルジエンティ（イタリア紀行ではこう表記されている。）が夢幻の如くによみがえってきた。こうして高速道路を北京にむけて走

っている自分と、ゲエテに連れられてシシリアを旅している自分と、二人の自分がいる。

ゲエテの旅は少しはかどってシシリアを去り、再びナポリに戻った。十九時現在バスは北京に向けて走っている。シルクロード、アジアハイウェイの砂漠をバスで旅するのも単調な時間だった。朝から晩まで風景は変わらなかった。でも心地良く緊張していた。何故だったのかな。ようやく北京間近になったようだ。世界中同じ郊外の風景に入っている。二〇時前ホテルチェックイン。

六月二七日

七時起床。中国でもワールドカップは放映されている。グローバリズムだね。ブラジルがトルコを下し決勝へ。正直なところ韓国を決勝まで行かせたかった。朝食後天壇見学。生憎の曇天であったが天壇は面白かった。これも中国独自の王の宇宙観念性が一つのランドスケープとして建築化されたものだ。万里の長城と同じ類のものなのだ。しかし中国的悪趣味はなく堂々とした建築らしい建築だった。西安の大雁塔にも通じるものを感じる。磯崎が言ったようにローマだね。ゲエテはシシリアで妙な悪趣味を感じたようだが、中国にもそんな悪趣味は度々歴史上にも顔をのぞかせる様な気がする。しかし都市を水平に延ばしてゆこうとする意志は強く、軸がなければ何も統御できないだろう。強い軸性は觀念の表明に他ならぬから、その根本を考える必要もあるだろう。天壇を見終り十一時前ホテルに帰る。昼食前にこのプロジェクトを起こしている公司を訪問。大きな葫蘆島市の土地模型が置いてあった。相当荒っぽい計画だけこれは。西部開拓時代を思わせる、と言ったって私はそんな時代を知らないのだが、まあ感じとしたらそんなものだな。国家による計画経済、計画主義と芽生え始め

た民間の資本主義とが渦巻いて、そのすき間に私のような不良外人が動めくという構図である。堀田善衛の上海が時代を超えて再出見している。ちがうのは服装と乗物だけではないのか。

この荒っぽさ、雑さに引かれて多くの外国人が中国へ中国へと参入しているのだろう。バタイユの言う外国人が多いバルセロナと同じか。日本や西欧アメリカでは体験できない空間だから。この荒々しさ、すき間だらけの空間は。磯崎新の中国通いを遠くから眺めていたら、その縮小版に直面してしまった。対面して、その空間に身を投じて、やっと色んな事がわかってくる。

しかし、大分前の事になってしまったが、磯崎の海市計画でマカオに何故か行つた時に食べた、場所は忘れたが昼飯はうまくいった。突然その味のデイトールまで思い出した。北京で食べる昼飯はそんなにおいしくないが、今回もメシだけは欠かさず、良く食べた。レストラン全体にウォーンという熱気とエネルギーが渦巻いている。凄惨な喰べ残しも出るのだろうが、そのゴミは何処へ行くのだろうか。中国の謎だな。食文化が国全体のシステムにまで波及しかねない。日本の食は細いね。十四時前、北京国際空港のラウンジで休んでいる。日本に戻れば又、チマチマした仕事の山だ。半島一ヶ何とかしろみたいな事はありようもない。

ゲエテはナポリに戻り、北方の民族特有の自省の日々を送っている。

短い箴言の中で彼は彼の正体も語っている。「現世を軽蔑せよ、汝自身を軽蔑せよ、人が汝を軽蔑するのを軽蔑せよ。」ゲエテは言う。もちろんこの中にすべては尽きているのだ。初めの二句は実行できると憂鬱病者でも思うだろうが、第三の句を甘んじて実行するには、聖者となるほどの修養が必要であろう。と。ゲエテ

その人が現れているように直観した。イタリア紀行を時間をかけて読んでいて良かったよ。しかしゲートはこの紀行に於いて、書けぬことが余りにも多過ぎたように思うと再び考えた。字面に現れただけの男だったら、頭は良いけど、それ以上じゃないぜという感じだよ。ダンテの神曲は建築家の想像力をふるわせるが、イタリア紀行にはそんな震源地はまだ視えてこない。

飛行機は朝鮮半島を横断している最中だ。朝鮮半島はアツという間に横切ってしまった。ワールドカップの熱狂が去った韓半島の上空を横切っているのだが当たり前のことではあるが、うたかたの熱狂には関係なく、朝鮮半島は地政学的に存在している。建築にもしも価値があるとすれば、そんな地政学的状態に基盤を持たざるを得ないという事だろう。

仕事とする旅も旅である。旅というのも実に正体がわかりにくく厄介なものだ。三、四日世田谷を離れて中国で過すのも旅ならば、三時間世田谷を離れて早稲田で過すのも、原理的には旅である筈なのだが、やはり何かが違うよな。世田谷の私の寢床を離れて、一時間屋上菜園に上るのだから旅の筈なんだが、やはり何かが違う。旅というのは日常の連続、退屈さを、一時しのぐ、あるいは解放され、想像力が少し自由になるといって、身の廻りの空間そのものの規定そのものの内に、意味を見出すものなのなんだろう。旅は現実には思考を倍化する。このメモだってやっぱり東京を離れている時のほうが量を書いている。思考の量と質が人間の最終的な意味であるのなら、そうであるならば、日常を旅状にしてしまう方法を身につけるのが、一番合理的な様な気がするけれども、そりゃ疲れるぜ。人間は休息というものが生理的に必要な生物なんだよね。隠岐の島の上空である。少し眠ろう。

日本時間十八時半頃成田着。成田エクスプレスの車内でイヤな風景を見た。通路向いのBOXシートの四人の若い娘、二〇代半端か、これが全員ケイタイ使って何やらピコピコしてやがるの。

大方のケイタイ常用者の顔は何処かが一本ネジの抜けてる間抜け顔が多いのだがこの四人は完全な白痴状態で暗号記号めいた短い会話のやりとりで終止しているのだった。考えてみればケイタイのやり取りは幾分か記号化されざるを得なく、当然常用者は言語表現がステレオタイプ化して貧しく均質化していかざるを得ない。うちの地下の連中を特に常用者を観察するにケイタイ常用者の会話は対面していてもケイタイ的な薄さから抜けられない。言語表現が貧弱である事はそのまま想像力の欠如につながるから、モノを作ることもおぼつかない。ケイタイ常用者は想像力の減退、停滞の傾向を帯びざるを得ないのである。ゲートは間もなくナポリを去る。

二十二時前世田谷に戻る。今度の中国行は太田の資料作りと野村の誠実さに随分助けられた。地下に降りてみたら松本が一ヶ月弱のヨーロッパ旅行から帰っていた。少しばかり話を聞く。良い年令で良い旅をしたように思う。私も少しは彼に良いプレゼントができたように思う。人間が育つにはやはり時間がかかるのだ。七月の地下は腰を据えてスタッフ教育にかかろう。少数精鋭に戻すしかないだろう。一人一人の人間にキチンと対面するしかない。それだなければ本当に良い建築はできようが無い。それにしても建築家達はこの難問にどう対処しているのだろうか。

中国から帰って世田谷村の空間に身を置いている。別にドラマチックな旅ではなかったが、何故か私にとっては大きな区切りの旅であつたように直観している。この直観をどう形にするか、ど

う現実化できるか、それが大事だ。拡散を続けるのはすでに得策ではない。私もすでに自身のエネルギーの限界がチラホラ見えてきた。これからは収縮させていかねばならない。その縮めてゆく力を表現すれば良いのだ。建築という形式を使って。無駄なことはしない。できない。まず、具体的に地下の人材を絞ろう。今のままでは敗けてしまう。子供の遊びになっってしまう。手勢を絞って態勢を建て直すことから、すぐに始めよう。

日経夕刊、あすへの話題、最終回は「手書き」毎週木曜日、半年間の連載を終えた。面白い仕事だった。これ迄私が書いたモノでは一番読まれたものになっただろう。それは実感している。スタジオヴォイスの連載も終わりで、これも又一つ区切りである。色んな意味で区切りと言うか転換点、転換期というのは実に平々凡々たる時や、場所でおきるものだ。私の場合は、旅から帰った世田谷村の大きな部屋で、たった今起きている。この自覚を生かせないようでは私の未来はないな。しかしまあ、こういう事が起きるから面白いのだ、とも言えるか。今日はグッスリ眠って、明日動き出そう。ベーシーの菅原も言っていたな、石山さん無駄しないですって。わかってる積りがわかってなかった。ようやくにしておわかった。馬鹿者だな俺は。